

序

ここ十数年の間に、高度経済成長にともなって、文化財保護の上から、埋蔵文化財の問題とともに民家の保存の問題が大きく取り上げられるようになり、さらに民家個々の保存とならんで、町並としての伝統的建造物群の保存の重要性が高まっている。当研究所では数年来、橿原市今井町等を対象として町並の基礎的調査を進めて来た。

文化庁は、昭和47年度から、伝統的な姿を残す町並集落の調査を進め、全国で180箇所におよぶリストを作成したが、昭和48年度には、具体的な保存対策をたてるための資料とするため、高山・倉敷・萩の3市を選んで調査を行った。当研究所は高山市の調査を担当することとなったが、本書はその調査結果を取りまとめたものである。

高山は飛騨地方の中心であり、奈良時代に国分寺が建てられ早くから開けていたが、現在の市街地は、慶長10年に完成した金森長近の居城の麓に営まれた城下町が次第に発展したものである。元禄5年からは幕府の直轄領となり、その番所を中心とした物資の集散力は、豊かな町人の街を発展させ、高山祭に象徴されるような町人文化が栄えたのである。

今も市内を宮川・江名子川等の清流が流れ、周囲は美しい自然に囲まれ、その町並は伝統的な姿をよく残している。日枝神社・八幡神社の祭礼には、華麗な屋台が繰り出されるが、この屋台を支えるそれぞれの屋台組があり、住民の共同意識の大きなよりどころとなっている。

この豊かな環境を守ろうとする住民運動も盛で、恵比須台組保存会・上三之町および上二之町町並保存会が結成され、自主的に規約を作り、これを守っている。伝統的環境の保存は、住民の心に深く根ざしてはじめて可能なことを考えるとき、この運動は特に高く評価される。

住民の自発的な保存運動と呼応して、市当局は「高山市市街地景観保存条例」を制定、積極的に町並保存に取り組んでいる。高山市は町並保存の面で、全国的に見て最も進んだもののひとつであり、こうした住民や行政当局の努力に深く敬意を表する。

本書が高山市の町並の記録として、また今後の保存対策の資料として役立つことを願うとともに、ひろく町並集落の調査研究の発展に資するところとなれば幸せである。

この調査に当って、前高山市長の故元仲辰郎氏を中心として、高山市・高山市教育委員会の絶大な御協力があった。また各住宅所有者の方々は快く調査に協力していただいた。記して心からお礼を申し上げる。

昭和50年3月

奈良国立文化財研究所長

小川修三